

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 510 JAPAN



門遠  
號 183  
卷 13

忠勇阿佐倉日記第三編卷之三

東都

松亭金水編次

明治二年  
十一月  
二十日  
晴

第五回

忠藏ちうざう 知縣ちけん ねまき ねまき  
小預書こよきしょ と 捧たて

勅すめ 小因よ 當田吾故鄉とうだいごきょう おもかわ

却說忠義等三個の者のしやく、思ひより鄉さとの荒果あらがく うちの貧あざうくりのう。是  
と詰さとへ速すみ お引戻ひきもど 便べん 潟せき もあく。まづ差さなめさなめ 六ろくをを及およ 喜代平しだへい 憲けん  
訴そをそ 救きゆ ひ出だ まんと商後しょうご 儀ぎ 一通いつつう の頼のぞ書しょ を認にん も。知縣ちけん へ到いた すと 指出しゆしゆ ほめぞ。  
奇沢きざく 眇里みゆう 威儀ゐぎ と 刷はら ひ まう出だ ての裏面うらおもて と うち 披ひ き 滣下ひんげ へ お着き 井いん 番ばん 等とう  
不愾ふあく も。京師けいし へ 航あ れ ふえ。農民のうみん 们 平生とよお 父み の如ごく おの ほの 憑ひれ。歎かな 仰あ へ て あ  
罪まこと と 有あ ん と おお あ のせ。大勢だいせい 系けい 附つき 登の る。義ぎ と 大だい おお 猥ひ き 下さ 僕ぼく 等とう 三個さん

あとあひら。すうきゅうふ  
跡逐廻上京懲のてかの者共と統のして當所へ追返す。ま後歸集めぐらしせし處  
元末愚時ごじの農民們根ねもろにとて市いち觸つ。邑いこ多殺離散りさんふあよと。俺  
法ぢのちを悉そぞ。まと仮莊屋たうやの吉代平よしよ両個池いけやぐくと見みと縁えん。或ひの後ごやく  
彼かれの多勢おほの兩個を繋つなて貰もら入る者ものうく。頗やうアふ發はき立たふよう。既既而莊屋  
の誠度せいどとる。兩個ともお后ご翁おきならます。と差りて下僕等しもべも。惧おそふ心こころ之  
此これ、近ちかいを在ゐ離散りさんの方ほうで精ひだりく索さ究く卑ひく門門庭てい。元の如ごとく小體こたい  
と僕下僕等しもべが職しょくのまへ速はやふ計けいらりんと存在するふ人殺ひぎりしし。一旦いつ反はん發はく  
ふるうとくべど。その眞まことてこの一ひと事ことするを。頗恩免やんめんあつて下僕等しもべふ力ちからを費うさ  
り乍ありのあく。又また小分隊こぶんたいと懲の。離散りさんの者ものを引ひ取と。不日ふじ小靜謐しこと  
べ。此儀しきと偏へん不敬奉ふけいつ。と怨うらをありてあ。畦わ里さと情親じゆしんせりて。肚裡はら思  
万まん一いつ言ことの如ごとくらず。你们めいが罪深重きゆうじゆある。と嚴ひざめりひざひざ。如此  
こそ離散りさんの農民們のうみんめい。元の如ごとくお聚あつまま。初はじめ你们めいが計けいらひひて戸と毎  
の者ものを唆そう。離散りさんさせせふ競きよひひ。然しかるくの你们めいが計けいらひひて戸と毎  
如ごとく取と聚あつまま。と丈じよとお聚あつまま。初はじめ你们めいが計けいらひひて戸と毎  
あり。何なにもあても遠とほの頃ごひ。一面まい許ゆふ如ごとく。と奸あざ計けい縛ばく慮りの附つき。急いそ忙いそ小馬こま。と馬ばの東ひが西にし方ほう。然しかるどもその上うお居ゐ村長むらぢょう



引副の漁と赤て飯と西と肉は今日の首尾りとあると家本虚を  
義々五古をも。千町をうそと刪るやどふ先とう乗るに良人之急ぎ死つた  
容あく安小世の間交不差へばして父の被咎を辞せば則ち亡駕を昇殿せ  
きてこそ在り。と改て今こそ悲すまの俗不聲へん方より。禮を博本聲をも。  
義虚云もあらんと歎きの中かゆ空特め。自心を慰め不果をて罪  
業の死を遙め。庵の床小属副。看病達を失ひ。ひら毛髪  
あらざる。罪不もあらず。飲食不繫がまと一匙の茶ざ。不進らす人わざ  
ぞと。世を退け。身下の心ハリ不在。人を搔口と蔬平伏。お腹の如ば  
秋子。ハ附木の見る眼も哀れむ。日ノ如ひ不虎沈死も。雲時悲歎不  
ふき。夕暮からて有べきことを。殊不との途中あり。未練をと人を笑ひん。

辛酉百四秋とも。降る尼免死出の旅却て速ひの程とあらん。故に度量  
廟をさよ。まつあ。まこと力も。疾かねて落葉の森浦口と刪り。終て  
忠義以下の三個。山崎より入る。葬てのと極くまと心と海をすみの  
のを。幕。菩提院へ斂葬り。れてまし祀り。も。こ不通夜とたまび。金輪  
度母不丈の後世とあらと。すまふ。折慶の急勢ある在。狂歌漫が機  
りて。垂手の間不む。型うちの付らひ如何。まごとは。は息吹きや心と碎きを密  
接の外他多由。左不も左不む難敵の者と。身守私て。水を不引。度とまの後  
の宗。も。漁翁。まご分隊する。千代。忠義。山城太郎。虎沈。御の美法  
と。あり。が。うらう。も。いせぢ。あ。く。えりん。ち。う。こ。う。ふ。せ。か  
虎沈。至三郎。あ。玉のうち。まさ。伊勢力路と。與うべ。六を。秀の忠義。加勢と  
と。京神及び。浪華。こうう。人散あり。の。聚むべと。究め。散連する農

民のまつ心和ら壯夫と五三人で引連て。あ翌日未明より更までちむる。  
時の極月廿日。千歳五口へ忠彦が上越へ降りて國内薦す後大會  
祠の獨り。喜と私と巡回の先頭を定め。又また引捕へ忠比寒獄へ  
下さん。威勢烈々と安らか万一陣の安不外を。余が頃は空をくさん。  
若下暫く身を潜め。不見見えざる所と旅宿が奥一階を用意す。  
月の未を待つて。年終と附か入の良き所絶ぞ眠れ。冬の日乾  
の庭うど夜多の食事。往々人の良き所絶ぞ眠れ。わが身と日夜  
而一も年の春秋である。ひわねて今日の脚走の七日志を果す。  
また二月三日。わの松(書)ハ箇拂とお認めや。まこと不敬をば。  
とその竹葉ふ心と氣と更不妻子のうとこえ忘れ。妙く衆人の折辱を救

んとあと。身を心と隣く。その赤心を懸け。折り比叡の山あり。どうぞ  
萬木雪り。その空高かと夏雲。霏と降る美雪。内の風をさり。信  
し。火桶をうち。物業とする。ちの更に免まと音信。隔紙因。ま  
と。彼の全の忠孝。眞に副たる。是單入りて漢と繰りま  
との頃の囁。まとも。方も障らを恙る。毛アヒミモモ。祝。先づ玉符へ  
拂す。身。自様との次第も。まづて。おもと。故ひ。新入方。分隊。難  
敵の族。身。自様との。おもと。身。自様。方。宣る  
らぬの心と。吾と。身。自様。方。宣。おもと。おもと。身。自様。方。宣  
る。身。自様。方。宣。小野の郷。索性。おもと。が五人。方。のまじ。役者。室を。在  
け。と。と。就。身。自様。方。宣。五人。方。のまじ。役者。室を。在

とどい。おもて。あさく  
辯多異を改めをうす。一刻り早く主内と。その御事と辨トせよ。門付金へ  
通つ。今後中へ入りよど懸て他へ寫生索あ。と吾々兩酒の。卷本ありと  
容とも祝ひまく有り。其と。具は張りあつまつて。小倍る郷の荒言  
足ね間の桜より。是魯呆とふ酒をまき。とまみ放て新創と。縣あれども様  
ふ慕り。我意と張て辯と計らば。とまく退院の君參さんとまづ延西、東リと  
弛べ頑不圖。物の如く。あまうとも程汗條あまく。と琴をとど詮あく。と  
よか。経の上とひよ。とあの上と豫ての志教。一月十九日の前尾全とまんと  
紳佛。さうと意ます佛へ。お物不取禽の財産と。敵。とまづ程汗條と。まづ  
國と乾井盡五口。財の集発をとうち被と。犯牛と見取史。まづと。安才  
を。お邊長縄やたの達だ。已あとく解さるを。化不假せら辯の心れ

えま  
命明の事。かくはん歎か。漆刪よりれと。とくと服を副て出ん。両側へ毛  
せ熟練終り。と。料鶴極め。沙。ア。原素文精を肺。及。の。あすれが速  
き。の。ひか入。と。養。と。相鶴。お。む。す。か。へ。ん。め。の。や。下。歌。ひ。寛。と。上。と。す。ん  
ど。と。請。と。寢。と。下。と。憐。と。私。と。わ。て。聲。聞。の。剛。か。也。と。と。そ  
待。遠。る。ま。と。の。渴。か。て。あ。う。の。膚。の。隠。ま。と。と。と。と。と。  
頃。五。三。日。纏。と。ふ。その。雨。櫻。あ。今。日。の。雪。と。人の。外。ふ。降。頼。ふ。朝。あ。い。と。様。り。見。  
ま。の。身。の。隠。と。ゆ。と。と。の。深。雪。は。寒。空。年。の。寫。あ。り。と。ゆ。と。と。と。と。  
天。際。の。沈。寧。る。眼。と。う。と。微。笑。ば。忠。亮。は。そ。実。か。然。り。あ。と。と。の。深。  
雪。の。周。と。燒。樟。と。ま。る。处。あ。う。與。亮。と。う。と。云。素。と。望。と。支。あ。後。ひ。多。ん。や。と  
只。不。善。口。の。良。榮。と。物。坐。の。よ。も。争。と。無。不。道。う。と。人。類。の。

身と續うち成る。身下の草も四下と見廻。又はほ細い地をば。未ん疊り異  
九月。寺持院へ詣軍家。果猪の毛わらふ。御衣を着半。往來の聲  
の如く。協中を至ると犯せる。料りあを足下を顧て。齋戒ある。阿達  
金本復んとの協と今だ。然且て遠田美法候勢と。最初お心もどる。  
故郷の浪費とありやせん。人我とも不胞衣と禮う。土地に葱々とわき  
一圓ハもれ無り。妻夫も遺び土地のまゝ。腹中もすまをまつよ。物ひを  
丈夫ももれ未練とぞもあらぬ様也。かくそ人の世不在や。妻夫是類を思  
ふの外耳。若毛ぞ一りもひう人の情のうとらべ。さきまきしあ廻す。廟  
きざるとの差別のと算不足下罪あら様と。強吏が情とを要めば。長故郷へ  
来ること。と目明会どり人族の弊の心を辨えま。お縣の寢尔典うらを

お前後を窺ふ。風不吹ふよりあらば。手廻へ飄蕩足踏へん。身下不  
思ひうれむるあきと。天傍偉ふの大雪と。下のべ支等の者。家不當  
そと外ぶがん。世方の暮れをうちる。面と隠し姿と換へば。誰う足下と  
ベシ。さうて一圓故郷へ往く。今日翌の中お若びとろくあり。故も生ゑあべ。  
といふお五只の頭とくち揮す。山巒を守る。已とても故にあま。寐る間と  
不忘れむや。きと稚と但見るが頬ゆ。又ま狹とくらべ。懇うる窮状あひれ  
万一大事と誤るを。念願忽記画屏と。あり。亡後までも笑ひ合ふ。と心と堅じ  
覚悟を究め。天命お仕えう張と。とりて史家のと。弗不おひ終ふ。  
と歎の放走六本あらう。吾們の豪傑家と差ひ揮きげ。禪師お陞ひ聖  
經へりふ及ばず。佛言をさゆうへかづき。左方りぐべきああねが既不



父あり一世と在今別きて未ま永劫再び面と食せざりと細き事

づねめ父あ夫婦のを情あり。佛もひよ羅喉羅を哀と。耶輸陀羅女の

別きて惜じ況や自比の凡夫也。吾们が云聚不隨ひ密か併て附て

づ別きて飯へること。優不絕しきどりわら頃もひ立つゝ。とばとお

て勧めたり。う湯石本わぬ身の忍びとの難けど。吾社丈可て女

ちくも妻子のを不曳き。密びあう不被處へた万不虞のとあうが世の胡膚

とあうやせん性ざるふ悪とあう。と再三固く辞やど可ぞ。兩個の往々詫と盡

と勧むらう不思ひ返一。然らば足下等が云聚ふ住。一般故郷の景物等

見且妻子ふも仰不あう。別きて飯へて床すべ。然いとて暴ふ意せの准体

とあしてち出づが如下雪ハ暫く小止て。外歩れも安くす日の音

暮れ辛よ。次第の誤不差けど。と本痛アトおめり。その夜て明し首の

朝まださふ死ぬて是まで。また雪と降半けど。かくて殊便宜す。然れ

ども境へ入らん。日中は多く人自も苦惱。夜ふ給もて寝やう。入らん

こそ上策をと肚裡お泥吟りて其時刻をす。食まふをや己の計お向

を。今もうとすもあらば。時刻の便利冥々と頃て以降度の誤すもそ。

急ぐともあく。被ふる雪、まづ一降頃す。乃ちノリノリ野の事。

妙不懶ありとて適きある。のとて塘りをひ群れ。満林す。とれのとき。

義吉ハとよと作ひ取て。体の爲め着る程をう。实ふ忠義がのびあ表

ハ。この深雪あ人の怖き。従来圓あらば街をまよ。左衣の家屋戸

をあら。東を。北を。西を。南を。あら。まよ。あら。まよ。のち

と進み。後々今ひと稀き。況や是より更にあだ。在所へゆ。と野路へ



間で寝んと戸口をまくる所すらす。是より人ふれぬところの所りを今  
の程へ候るありと見てえーが。まさしく船一艘の小舟と岸の繫びにて近  
来舟泊とありやれ。若然もあべ未至の旅太夫多渡と餘愁。度を  
作て馳せりき。かの番人の麻帳より唯と圓脣を大び伸。腕を擦摩を。  
身もあくと養生す。何より何方へ旅まへたる事無むりつゝ事うら  
須まで候るを樂う。は猶あく支を拂ひ舟泊とあらへ輒く從未だ  
よせぬ爲く殊おめ暮の六時あらまを。後深水宿で漁舟どじ出でる  
事のあゆみ五の朝まで漁をしてゐり飛。と改て當吾へる事あらむ  
この川へと歸る所川ある。名考と見る歎きの「急ち内おがれごん拂の辰也」  
も下を岱のうち單とせやとたきおまえ載らまする。水とぞ單より勝る易

し。捨て拂ふを要した不為れん乞徒トテと體らんと捨拂てましをす。毒  
人波て呼留め。旅客候ねひふのあつての木の舟の勝船をぞうの波を拂る  
手と拂ひ舟泊と看とく。食もの要心きらんや。是より遙の川下か。  
航行とばせて水を堰満とほ満まで水丈(千尺)の幅もある。瓢舟傍ら  
が急流お溺るとぞ大魚の腹を入らん單やと襟立とある。とらひ立と不謹と  
あけ雪の光アキラカに見て。驚き用章傍ある。戸と用口を齧す。出傷の和  
君の衣井の小擅那。み天雪ホトリヒ挂らき。おひが徳物ワセグ心を定め  
おうす。宅平漢士うづくらぬ。背く胸を安めて。四下足まく。おひが徳  
ぬあがるよと索ねま。宅平の頗著で。おひが徳物ワセグ心を定め  
おひが徳と後不忤とて元め。安らぐがりをひ。まづ二且とまづえんお

さとそ渾身の冷めぬ。こもくと傍へよ。蓑笠脱せ草鞋と解き書  
ひやまみり。おとひよ。れくと。うちうらうら  
小屋不篠ひ入と。柴さくとて大せ燃し。この能ひ来る人あれば静か骨  
ごのとまう温茶とぞ進めろ

第六面 宅平の義心録と断難説

古千代の一言良人の心と圖子

再詫宅平の當吾口づ候。諒至傍て姿を低じ。候り大人の大配す。和君の  
辛劬肩をぬ。吾们こそ自腸で歎きふ存ざまど力の及ばべまうわが。  
且暮ふ落す。心と惱うわ不觸と。辱と嘆て母をうむ。善とあまび胸  
きを却し。惡一々雲べ死ぬをうか。且ひ與りそらの率の頃果よりと辱矣。法  
俱ひひかねゆる。禁る事もとの極。仰方本懲ら辰タアん。日來より

志を下す憚きと。哀悲深く。志を諸人の折慶と枚ひ多。多度の駆す代  
替て。暮れぬ志のゆゑ。箇被の使のあり。今年のうの要事の巡り未  
なる。うれしき。惱このへ勤ひ。是を以て世間の神の佛也在焉。と歎  
く。就て。徳ある。人三筋の歎く。良禽鳥渴て。走物皇ふら。終ふ吾們。京  
及。何ん。故禍と遙かと。家と昇妻をと引連と。遂電す。の多き。不  
ま。す。か。の。不。あ。ぞ。と。受け。和縣を推量。あらう。憎え。と。あ。ら。す。お  
も。捕て。坐を。の。あ。べ。三千。乗。と。賣。と。觸。と。年。と。恩。と。撫。と。被。と。被。と  
夫の。こ。う。ま。と。離。と。和。縣。の。命。令。金。手。延。と。夫。の。あ。く。ま。と。ど。无。賴。の。旗。の。欲。禁  
昧。不。良。の。心。と。發。ま。と。あ。え。と。心。悪。と。思。い。信。と。の。ひ。京。原。の。勤。耕。の。不。知  
ア。と。在。ま。と。和。君。が。と。と。あ。り。ひ。と。ま。と。月。と。五。や。と。暮。と。う。同。安。難。説。

人の心も多事が。猿ももその上本夫役お便りを妻や兒が。女房の業夜  
の眼の候を。丹波守する衆様。人數を酒いとを十人以上の方から十日か  
一。鶴の運上せよ。割合も應せぬ苛刻。竹えらく董永が。渾家お望  
あん能を。物の如くの嚴。まことに。逐電執事。其の者。大臣。空洞。他  
の城う。吾們も頼らう。比と。化ふ性たと。也。董永が。眞暮か  
歌の。ま不思ひ。三回の風。食と。の銀。月日と。送す。不  
一。蛇籠を伏せて水と堰ら。水道と。指す。底。高の處と。縦と。表の。離散と  
往む故ぞ。とりて。貴様上下の事ある。非民。猶頗と。頼低。方あり。且  
曲よりと。あり。唯。面と。而と。下り。俱。天端の間あれ。

人となり。金ドモ。さと。收く。うすりのあ。然。あ。も。小擅取と當。意  
頬。うち成。ま。笑。ぬ。毒。苦。愁。愁。心。中。天。不。幸。入。固。う。役。面。の。課。役。ま  
比。ひ。も。あ。ぬ。非。序。う。と。うち。歎。け。き。の。泣。子。と。地。頭。の。役。面。も。あ。辛。苦。そ  
只。意。を。き。の。計。ら。ひ。と。懨。え。と。ど。ひ。と。心。と。碑。く。お。服。み。を。生。て。夫。役。と。充。刻。安。す。ち  
も。續。連。上。を。把。ん。と。六。秋。漢。例。見。修。奉。る。う。然。ま。ど。も。你。が。い。ぶ。や。上。こ。下。あ。差  
き。別。あ。う。と。下。あ。る。に。理。非。不。曲。ら。ま。と。士。う。人。の。非。と。ほ。不。曲。る。と。と。も。吾。们。が。立。昇  
賤。の。情。頼。用。る。人。を。核。威。と。以。て。推。悉。ら。よ。也。如何。も。詮。方。う。吾。妻。嫁。伴  
せ。勢。あ。京。登。登。や。所。供。食。の。人。離。散。の。う。因。岐。と。極。て。う。候。き。つ。を。面  
故。鄉。へ。販。て。そ。の。業。勢。で。祝。よ。く。旅。あ。て。と。ま。と。難。れ。ん。を。書。て。す。ま。が。難。路。否  
ト。づ。か。自在。み。だ。か。そ。の。故。鄉。へ。入。難。い。と。ま。う。花。落。引。込。え。汝。善。き。妻

至。遭とあは今宵のことを終ち。宿明にて渡らば  
善けまじ。寛て得まば自置也。此咎も。緋徊做一轍。夜の更なる  
頃退らる。傍不在す。蓑も。把も。肩へ挂んとまづ。尚不。宅平の如あり。既  
而と主て舵引挽外面。坐ること入るが。舟を繋ぎ。終豫不復更圓く  
續せし。膂力不仕。發矢も。二打三打うちけきど。輒く。往用す。蓋吾の  
猿を遣出で。その手を捕へ候とうまう。然不汝従うち切て。吾を被廻へ渡る。あ  
狂乞の附まふ御る。殊べ。あくまく。かう。勝手。あまふ放て。の。畢は。す  
不罷て。空め。そ。嚴科不處せまえ。是吾忍びざる所。ま。保不退く。も。  
却て。候く。がり。あと。努。と。急。と。走。と。止。あ。て。む。往可。無念。ひ。罪  
科。不。遭。が。あ。ぐらす。厭。り。ん。去。ね。る。月。初。君の。腸。の。あ。ま。る。高。須。の。虎。刀

の。称。渾家の。主。す。蘭。め。命。す。終。を。棄。の。如。く。が。玄。と。遂。る。一。件。の。全く。わ。君。を。大。恩  
を。ふ。る。然。も。あ。た。吾。们。う。だ。心。不。徹。と。年。月。を。経。多。種。と。も。忘。ま。で。す。ば。  
恩。と。報。う。の。あ。ぬ。り。と。盡。吾。が。經。む。を。う。拂。ひ。再。び。發。矢。と。うち。け。え。  
裏。下。宿。の。聞。き。の。篠。日。弗。と。副。難。う。盡。吾。の。こ。そ。終。そ。嗟。歎。み。今。未。か。な  
ま。う。と。後。月。未。ま。う。り。の。あ。う。ば。你。不。従。と。發。う。せ。そ。吾。既。处。甚  
え。と。よ。か。り。あ。ど。い。れ。就。と。親。て。宅。平。が。り。で。船。底。を。渡。ま。ん。為。不。従。と。発。う。こ。下  
さん。や。开。い。ほ。ん。易。か。下。従。う。や。篠。日。底。も。利。す。く。ネ。き。よ。ま。ん。今。こ。う。故。行  
復。い。が。下。ち。末。と。船。お。家。あ。向。ひ。の。居。へ。活。ま。ん。とい。ひ。つ。已。ま。づ。蘿。蔓。を。水。掉。て  
撤。て。候。不。ど。か。ま。さ。吾。も。や。そ。身。と。弃。だ。ら。ば。云。系。不。陸。が。ん。吾。既。お。寛。と

渴て在下も左ての安穩さのみ。家へ歎ふべき筋りある様ども、你とて正るた  
事。臘木簡室<sup>ト</sup>ぞ安撫する。と欲身にて止ると宅平町<sup>ト</sup>とうち笑ひ長の爲め  
何ぞうの臘被<sup>タマ</sup>も悔<sup>タマ</sup>と思<sup>タマ</sup>。所詮<sup>タマ</sup>此不在陽<sup>ハ</sup>夷使<sup>タマ</sup>れど其事  
人並<sup>ト</sup>の食<sup>タマ</sup>不<sup>タマ</sup>。臘辛<sup>タマ</sup>渴て死<sup>タマ</sup>る。生るかの往倍<sup>タマ</sup>。と是と何<sup>タマ</sup>と  
笑ひ<sup>タマ</sup>。操るやど船<sup>タマ</sup>のちや向ひの事<sup>タマ</sup>不<sup>タマ</sup>。う得<sup>タマ</sup>不<sup>タマ</sup>長<sup>タマ</sup>冬<sup>タマ</sup>夜<sup>タマ</sup>れど  
ちや三更不<sup>タマ</sup>向<sup>タマ</sup>。との雪<sup>タマ</sup>の降止<sup>タマ</sup>と世界<sup>タマ</sup>を<sup>タマ</sup>白<sup>タマ</sup>。東<sup>タマ</sup>西<sup>タマ</sup>不<sup>タマ</sup>辨  
私<sup>ト</sup>とえ来安門<sup>ト</sup>かう<sup>タマ</sup>。安吾<sup>ハ</sup>船<sup>タマ</sup>よう<sup>タマ</sup>。宅平不<sup>タマ</sup>別<sup>タマ</sup>。路草  
め<sup>ト</sup>急<sup>ト</sup>不<sup>タマ</sup>。僅半晌<sup>可<sup>タマ</sup></sup>。農穡<sup>タマ</sup>家<sup>ト</sup>到<sup>タマ</sup>。門<sup>ト</sup>の意<sup>ト</sup>不<sup>タマ</sup>。售  
まう<sup>ト</sup>窺<sup>タマ</sup>。先頃<sup>ト</sup>かく松多<sup>アリ</sup>。奴婢<sup>等</sup>の身<sup>ト</sup>の服<sup>ト</sup>と<sup>タマ</sup>せ家<sup>ト</sup>  
その<sup>ト</sup>と處<sup>ラ</sup>う<sup>ア</sup>と住<sup>マ</sup>人<sup>ト</sup>と<sup>タマ</sup>舞<sup>ル</sup>。三四人<sup>ト</sup>されば寂寥<sup>ト</sup>。不<sup>タマ</sup>

新<sup>ト</sup>と不<sup>タマ</sup>。僅半年の間不<sup>タマ</sup>。かく盛衰<sup>の</sup>換<sup>アリ</sup>。思<sup>ハ</sup>怪<sup>タマ</sup>と哉<sup>。</sup>  
吾<sup>タマ</sup>歎息<sup>ト</sup>。脅<sup>テ</sup>の方<sup>ト</sup>うち廻<sup>フ</sup>。戸<sup>ト</sup>剝<sup>ハ</sup>啄<sup>ト</sup>殺<sup>ハ</sup>。於<sup>タマ</sup>千代<sup>ト</sup>蟹<sup>ト</sup>  
は<sup>ト</sup>奉<sup>ハ</sup>山<sup>ト</sup>。食<sup>ハ</sup>人の身<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>。あらかく<sup>ト</sup>棄<sup>ハ</sup>。下<sup>ト</sup>化<sup>ハ</sup>。束<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>心<sup>ト</sup>易<sup>ハ</sup>。ま<sup>ハ</sup>  
圓<sup>ト</sup>。後<sup>ト</sup>大<sup>ト</sup>雪<sup>ト</sup>。あらひと<sup>ト</sup>寒<sup>ト</sup>。殊<sup>ト</sup>憚<sup>ハ</sup>。圍<sup>ハ</sup>。殊<sup>ト</sup>寒<sup>ト</sup>。  
身<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>衣<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>おぬひと<sup>ト</sup>。脅<sup>テ</sup>の戸<sup>ト</sup>敲<sup>ハ</sup>。と<sup>タマ</sup>う<sup>ト</sup>。若<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>。<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>着<sup>ハ</sup>れ  
だ。左右<sup>ト</sup>脇<sup>テ</sup>の<sup>ト</sup>肉<sup>ト</sup>せ<sup>ハ</sup>。誰<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>と<sup>タマ</sup>。寝<sup>ハ</sup>。不<sup>再<sup>タマ</sup></sup>剥<sup>ハ</sup>啄<sup>ト</sup>。於<sup>タマ</sup>千代<sup>ト</sup>戸<sup>ト</sup>  
本<sup>ト</sup>頬<sup>ト</sup>傷<sup>セ</sup>。身<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>低<sup>ハ</sup>。誰<sup>ト</sup>と<sup>タマ</sup>。身<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>方<sup>ト</sup>小<sup>ト</sup>声<sup>ト</sup>。於<sup>タマ</sup>千代<sup>ト</sup>戸<sup>ト</sup>  
開<sup>ハ</sup>。と<sup>タマ</sup>ひと<sup>ト</sup>良<sup>ト</sup>人の<sup>ト</sup>声<sup>ト</sup>。又<sup>ハ</sup>今<sup>ト</sup>繕<sup>ハ</sup>。と<sup>タマ</sup>遣<sup>ハ</sup>。不<sup>再<sup>タマ</sup></sup>购<sup>ハ</sup>。千代<sup>ト</sup>  
戸<sup>ト</sup>虎<sup>ト</sup>。外<sup>ト</sup>と<sup>タマ</sup>。あく<sup>ト</sup>。吾<sup>ハ</sup>前<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>突<sup>ハ</sup>。誰<sup>も</sup>脅<sup>ハ</sup>。  
と<sup>タマ</sup>と<sup>タマ</sup>と<sup>タマ</sup>。の<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>聲<sup>ト</sup>。あく<sup>ト</sup>。吾<sup>ハ</sup>前<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>突<sup>ハ</sup>。誰<sup>も</sup>脅<sup>ハ</sup>。

ううぐをれらう。こう ううぐ  
交を重て難か心と慰めら只とまど。まえの二三日川舟のあつた。  
いま  
暇あくと身と身のまど。ふ然の便不人へ。りうよがとん大雪ふ。夜降り  
いと  
麻ひを解す。久。頬うるさの跡へく。まごちの條の葉ドらま。四下から  
あらわす。もとあ  
胸心拂ふゆり。もづ頬とようやく。まごと渾きの冷かぬ。曲來禁つて湯を  
うすす。ま  
佛一足とほぐせあらせん。と懲ふ。暮あてく。然また火熱か良き人の熱。熱  
うるを  
えすとがきまさら。眼まへあち凹む。暴ふく。寧まきる。もと血を重マキ。お  
と  
緯の様まがまご向緒ど。義よりあつてあつてあつて。せよと心よ人急れて湯  
とが沸く。身累む。まづく。身まづる歎。身奉る。うまく。心よ人急れて湯  
こども  
み代り今かよく寝入。身うれどもあと眼勞す。うかがひまく。身  
いりうち。よし  
あまとあん身が面お役員の迷ひうるまねぐ。うく瘦れすぎ入るくいと





祖父母も爺さんも程ある長めとて餘地あり。飯初の旅もまだ未だ  
接をへまし再び疎がれ渡てキリ。是もまたと見えぬけれども、  
さう度々を例のまゝ程お居てゐる。嘆きまくしてお詫びにて。陪れ  
そゆて誰もどうしてやむを教せつた。何ともいはざまに遡りて。今ま行芳  
も悲をうつぶひを知ぬ。嘆きまくしてお詫びにて。陪れ  
離さる。ほの悲をうつす。と眼を潤ませる。市が頬うち瞻望を以て  
吻を。怜憐けまでも十束もありえぬ。雅心が遠圓のまゝて何とも思ひや  
らん。也辨へぬ苦心より。雅心者こそ不快もまたどんが涙の懶まらず。ま  
まらーとと拭て。最もまことに仰處へり。程ぬまうひ候物語かと。候物  
らうす。おせよ。此新あつてなほ人が金賄と牛と。麻あやをもたれ

一ぐ。生ち。至極。今か祖父を身を失らます。妻市大吉と成らみと賣りうる程  
ふ。然大人をうそと廢や。唯妻分をちの寄りあひ。上方の王産の。涼馬で  
顯る。とりひきそ秋の。妻市義久。膝のきうと新まゆすをもう得多の  
恩愛がじ。世が憑みをぬひ。がる處ふ色の歩奴。門に天音庵を齋  
の。後一軒。宅平漢士が奉り。晝夜被災が絶切る。如何うもあて繁  
り。縷も縷も甚切。年へ何方へ家捨て。筋合せぬ水のきかく。筋合  
へ走り。渾家の尾喰本多。せき様。修て又とば家本居らば。ゆく怪  
徴先を尋ねる。出か後へ。此方の事の。は死難室す。女と引取て。又と  
え尾喰本多。ひき條う些も分解を。その由和縣へ訴へ。下旬の衆が見

分あり。又お星へ行かう夜中お出と渡らんと做せりと宅平禁制の臣  
をみて絶やう。素モ一君の威勢強く妾不諱と寢と切り渡し故お宅  
平の玄秋と首縊ヤシと。渾家ハ朝廬と齋奉り。とあはれ勢あ仰天。  
悲歎の聲す。思慮ゆき。身を殺て死へるもんよりば渠ハ冥修矣。  
誠忠義心の者うそ。情まことうへう。愁うみをもとの禁と祀。體さへ何者  
れ。疾邑といひ觸て穿鑿あり。あくまく。然どども後の後。長て裏裏  
堵木居。你多數人分隊と。軒別不觸と歩れ。差す懸と便幸う。早  
ふ進せよ。と命令らきぞり。とりひ於と衡とゆ。爰五古とぞて破散だ。  
嗟乎。手を緩め。身を食あそべ。舞み一人あそび兩個まで。吾由多奉と預  
せ。あも。どうの罪陳う。坐下吾ゆうの漏の計らひや何おまるすんと。只  
せ。允名がどの身の罪陳う。坐下吾ゆうの漏の計らひや何おまるすんと。只

まよあらあら私どり。切る櫛ハ繫ぐ不うき。渠垂まくおの所と立退べき  
方すみ。といひ輕くるひ。元本心急うう。その儀かと立かう。膝で  
死まえ。と見入候。神のみのむのむ。南雲幽靈頃生苦恨。から干  
隔。方漢士不あも。あもて吊ひ懲か管。ももまよまを。未だ不快な  
男といひふせん。と枚画歎息。ものれ。於年代ハ歩取りに渡。岐事に  
良人の容を傳へ。片膝あそび終。その傍一間へ並入りて。あん身分筒の物  
語小太吉車と宣へせ。若吾們が心と休む。虚云あらまん。と猶ある  
容を窓大わら。名ひひび。歩取りに渡。岐事に。あらまく。とこれあらひあれ  
ま。努力矢等あら。も付た。あん身が胸不氣休め。虛云あらん。と春の春  
と在る。今歩取りに渡。岐事に。あらまく。とこれあらひあれ  
と在る。今歩取りに渡。岐事に。あらまく。とこれあらひあれ

措さと死。生まぬ後悔本障りき。かくのあらんうへゆ。伊相のえんめ空  
も詠。と膝もく傍て顔うちばる。嘗吾今更累むす。実秋葉と挂けよ。  
思へて種よりひ湿ゆ。と腹本氣別生を飯。再び花落剣らふ。と絶筆化で  
飾。やうが。かくある上は是非も。有すと候らんと奉る。五月九日。將軍家へ  
ぞ。お詫へ書を奉らんと心を決せ。うとうて東家を亡失。うつが初め不任せ。  
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。  
父おと帰ら。とお葉の別生も。其欲こそ雪。と饒倖蓑と笠とお姿と抱へ  
奉り。所どひの桂。後櫻と拂ひ糸を繋ぎ。夜中ハ時をとまらず。と巖  
一を捨て宅平。日本恩の恩お報ふと。箇様とお做。また。蓬莱新の限  
もあり。お志と。おせんや。と渠が情。おとびまで。おと身と。おと身と。おと  
身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。  
おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。おと身と。

(人) の多あす。いと金張り嚴さんと。と速不遅あへ矣。ト。尊暮と候で。ま  
出さんと。僻遠さくの宿。と。あちよ。と。えぞ。と。まく。と。まく。と。まく。  
腸えり割離。と。下と。まよと。自然胸が離て。と。淡然と。と。涙と。と。  
拂ひ候と。沉吟して。この歌と。千回百回口説。と。甲斐。と。義。と。と。と。と。  
う得因。憂心。心申。と。また。と。仕掛。と。ゆく。と。あらん。雅。と。善。と。良。今  
心と。廻。と。すと。肝。要。と。と。胸。が。沉。め。と。亮。尔。と。笑。ひ。と。の。忠。誠。不。善。  
吾。僕。女。ふ。あ。ま。と。せ。た。法。恨。不。力。扶。け。余。と。捨。す。わ。ま。を。を。實。小。女。子。の  
甲斐。ふ。と。と。悔。一。深。そ。と。立。ま。す。根。不。一。心。の。向。人。所。不。と。の。失。の。怨。聲。す。あ。  
當。下。至。尊。セ。犯。一。ぬ。罪。と。万。一。命。お。保。る。と。の。あ。り。と。笑。ば。吾。脩。俱。不。及。  
不。休。と。冥。土。の。舟。を。做。一。ね。ら。ん。ほ。意。の。世。の。幸。と。て。非。業。不。修。つ。て。ある。

とも元とま精人のありし。鬼の毛ふたり參まう。私多ひの淨婆梨  
の境不換でそ冥の照覽更不燃び所あけどば未世の淨あお生え。先  
身あ父吾脩が泰山就か非業の死を喫へ。その仇とえ討ふ。争  
争存命廢らる。石でもたてて死すと命と吾修のか核を尊ん候下  
方必死にあきとぞひ外不勇キ。何と當て當吾ハ秋び至不思ひ  
宣むるの心不遠す限より。もと自殺そ人傾くぬ。夕廻洞へもれんと心  
強くひのりのう。君ひの全一父を支拂。入相の傍りう共ふ。迷う出る門の  
13.かくる食人オ人送る妻み。菅の小笠白の雪不紛ひそ見えぬべから

忠勇阿佐倉日記第三編卷之三終

天王寺  
天王寺  
栗谷

